

Title	『中根雪江先生』
Sub Title	
Author	高木, 不二(Takagi, Fuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.233- 236
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0233

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Conclusion

結論で Camps はオデュッセイアー XXI. 392~430、イーリアス XXII. 437~472 を引用しながらホメーロスの特徴を総括している。なお Appendix I, II で両詩の構成並びに地誌について簡単に面白い指摘がなされているが、関心ある読者は原文を読みたい。

以上、簡単に内容を紹介して来た。本書はその性質上特別新しい見解、解釈は示されていない。しかし、種々な問題を要領良く簡潔にまとめ極めて穏当な説が展開されているのは誠にイギリスの人の本らしく、本書の大きな特徴となっている。補注を含めて百頁そこそこの小冊子ではあるが、これから翻訳でホメーロスを讀もうと思う人にも、何度か原典を讀んだ人にもぜひ一度讀まれることを薦めたい。評者の職業から、高校生にも讀めるよう原文の持っている明晰さと簡潔さを失なわない日本語にどなたか識者が訳されることを期待したい。最後に、強いて本書に不平を言え、索引がないのが残念である。せめて本文に引用されている箇所索引だけでも付けて欲しかった。(80. VII. 14)

『中根雪江先生』

高 木 不 二

この書は、幕末・維新时期列侯の一人として中央政界で活躍した

批評と紹介

松平春嶽の側近にあって常にその手足となって働いた福井藩士であり、同時に『昨夢紀事』『再夢紀事』『丁卯日記』『戊辰日記』など維新史研究の上で第一等の史料と目される著述を残した修史家としても有名な、中根雪江の百年忌を期して一九七七年十月に編さんされたものである。従ってやや時宜を失した感はあるが、他に類書をみず、又一般には入手しがたいものでもあるのでここで敢えてその内容を紹介し、あわせていくつか気付いたところを述べておきたい。

本書の内容は全体としては

序言

一、図版

二、伝記

三、資料

四、図版解説

附録

系譜

年譜

という形になっているが、ここではその中心をなす伝記及び資料について触れておくこととする。

まず伴五十嗣郎氏の執筆になる伝記についてみると次のような構成をとっている。

第一章 中根雪江の生立と学問・思想

第一節 中根雪江の生立

第二節 中根雪江の学問

第二章 藩政への参画

第一節 幼君の訓育

第二節 守旧派の反発と御側用人就任

第三節 藩財政の復興

第四節 諸学の振興と軍制改革

第五節 天然痘の撲滅

第三章 国政への参画

第一節 嘉永六年から文久元年

第二節 松平春嶽の政事総裁職時代

第三節 文久三年四月から慶応三年

第四章 王政復古と徴士参与職拜命

第一節 大政奉還と雪江最後の活躍

第二節 宿浦閑居

第一章・第一節においては、中根が文化四年七百石寄合席に列する家に生をうけてより、若き藩主松平春嶽（慶永）を擁し、みずから御側御用人に就任して本格的に藩政改革に乗り出す弘化四年までの生いたちと経歴を略述する。第二節では中根の学問について述べ、中根が越前人として初めて平田篤胤門に入門し、そこで学んだ国学を柱に自らの思想をかためつにはそれが藩主春嶽を通じて藩政にも少なからぬ影響をもたらしたと言う。なおここに於て越前における国学波及の経路がある程度まで明らかにされたことは、伝記としての意図を越えて本書の一つの貴重な成果となっている。

第二章・第一節は春嶽襲封直後に再びさかのぼり、中根等有志

が春嶽を藩政直しの軸となるべき主君に教導するため、側向の体質改善を断行し、中根みずからもその政治理念に沿って幼君への建言を行うなど、その訓育に精魂をかたむけ努力していった過程を克明に述べている。第二節はそうした中根が、改革派の一人として、一旦は藩内保守派の反発を買い役職を解かれながらも、春嶽の厚い信任と強い要請によってついに弘化四年側用人本役に就任するに至った経過を記述する。第三節は実務家としての中根に焦点をあわせ、彼が「御勝手掛」として藩札の整理を行う一方で、天保以来弘化・嘉永・安政期と一貫して強硬な儉約策を主張断行しつつ、藩財政再建の中心的存在として活躍した様子を映し出している。つづく第四・五節においては、雪江の学問即ち国学が「皇国学」的な広い視野を喚起し、彼をしてかえって蘭学等諸学をも取り入れさせる方向にすゝました点を指摘し、それが藩軍制の洋式化や種痘の藩内実施への尽力という形で具体化されていった経過を実証していく。この両節の叙述の中で、国学の排外性をのりこえ蘭学等の摂取へと中根が学問観を展開させていく過程は史料的制約もあって十分実証されているとはいえないが、種痘実施の直接の功労者である蘭方医笠原白翁も田中大秀門に入り国学を学んだ人物であるとの指摘と考えあわせて、蘭学（洋学）受容の上で国学の果たした積極的な役割について改めて検討をせまる注目すべき問題が提起されている。

第三章・第一節は嘉永六年以後、中根が橋本左内と共に春嶽の片腕として將軍継嗣運動に奔走する時期から、それが一旦安政の大獄の中で挫折せしめられ中根みずからも役を免ぜられながら、

やがて幕府の軟化と共に文久元年側用人に帰り咲き江戸詰となる時期までの動きを追っている。第二節はそれにつづいて、文久二年春嶽が悉皆罪をゆるされ政事総裁職に就任する前後から、翌文久三年將軍上洛に際して入京した春嶽が尊攘激派に翻弄されむなしく帰藩するまでの期間、常にその「帷握の謀臣」として活躍した中根の様子を記している。第三節は、文久三年春嶽帰藩後中央政局打開のための挙藩上洛計画をめぐって藩論が沸騰し、計画に反対した中根が一時隠居の上蟄居を命ぜられながらも間もなく復権し、以後慶応三年にいたるまで六度迄も上京して朝廷・幕府・他藩との周旋にあたるなど、文字どおり春嶽の手足となって働いた経緯を物語っている。ここで特筆すべきは、蟄居中の中根が「尚友書屋記」と題する木版二枚の裏面に記した「天下之善士」百七十四人の名が掲げられていることである。これは中根雪江の交友範囲を知るとどまらず、この時期の越前藩の持つ人脈の広さ及びその影響力を知る上で好個の史料であると思われる。

第四章・第一節は慶応三年大政奉還の報を受けて入京した中根が、王政復古に際し春嶽と共に徳川宗家救解と内乱回避のため必死の奔走を行う一方、新政府からまず参与、追って慶応四年徴士参与職として「内国事務掛り」・「内国事務局判事」等に任じられたのち、同年閏四月の官制改革に伴って退役・帰藩するに至るまでの経緯を描いている。第二節は帰藩した中根が隠居にもどり、私邸に閑居しつつ『丁卯日記』『戊辰日記』『奉答紀事』の三書を書きあげ、明治十年東京にて七十一才の生涯を閉じるまでの様子を記述する。この節の中で、雪江が当初「昨夢」「再夢」「三夢」

「四夢」「終夢」の五書を述作せんとして果たせず、そのうちの後三者が『丁卯日記』『戊辰日記』『奉答紀事』として予期せぬ形で結実していった過程を考証した箇所は、維新史研究に際しこれらの著作を史料として扱おうとする者にとって、その性格を知る上で一読の価値を有するものである。

以上伝記の内容を恣意的なコメントをまじえつつ簡単に紹介したが、これによって春嶽を育て、後には春嶽の影となって活躍した中根の姿が、本書によって初めて浮き彫りにされていることが察せられよう。

だが伝記全般にわたっての問題点を言えば、中根自身の主観的意図を追うあまり、春嶽に密着した形で中根がとらえられすぎているのではないかということである。換言すれば中根の歴史的存在としての位置づけが十分になされていないうらみがある。本書の文脈に沿って言えば、少くとも中根の国学思想の幕末期に於ける位置づけ、あるいは藩政改革派・公武合体派として果たした中根の歴史的役割の確定などは中根を理解する上で不可欠の作業と思われるが、視点が福井藩ことにその上層部の間関係に限定されているため、そうした点について言及がみられないのは残念である。又部分的には、剗札嘉永四年三月十九日「遠慮伺之上指控被仰付置い処御用指支に付御免被成い」とある記事についての何等かの解説が望まれよう。

次に資料について簡単にみておこう。内容は左のようになっている。

一、中根鞞負建白書

- 二、したとめ草
- 三、中根大人芳吟草
- 四、平田篤胤著述に対する序文
- 五、雪江に関する顕彰碑文・墓表等
- 六、松平慶永直筆（福井市春嶽公記念文庫現存資料）になる雪江に関する記述・記録等
- 七、雪江他界前後の事情を示す越前松平家の記録
- 八、中根雪江・橋本左内往復書簡目録
- 九、雪江著述解題

この資料のうち一の建白書は、中根が天保十年当時十二才の松平春嶽に呈したもので、一万字を優に越える長文のものであるが君主がいかにあるべきかを説く中に、中根の政治思想が十分に披瀝されており、興味深いものである。二のしたとめ草は、中根が明治四年嫁ぎゆく十五才の娘千代に与えた訓諭であり、中根の持つ人間観・道徳感が情味ゆたかに述べられている。三の中根大人芳吟草は、中根がみずからの歌の添削を依頼するためにつくった歌集原稿と思われるもので、書かれた年代及び添削者は不明であるが、中根の歌人としての一面を知りうる貴重な史料である。四は師平田篤胤の著述「三五本国考」と「皇国度制考」に寄せた序文の写真版を収録しており、「気吹舎」門人中根雪江の面目を伝えている。以下については省略する。

最後に、これまで松平春嶽や橋本左内・横井小楠などの動きにかすんで忘れられがちであった中根雪江に初めて照明をあて、適切な関連資料をも併載した良心的な本書の上梓をあらためて喜ぶ

と共に、これを一つの踏み台としてより立体的な明治維新像が構築されていくことを望みたい。

（一九七七年十月三日刊・中根雪江先生百年祭事業会・A五版・七八三頁・非売品）